

---

# 非日常はお嫌いですか？

桜凜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非日常はお嫌いですか？

### 【Zコード】

Z5954X

### 【作者名】

桜凜

### 【あらすじ】

彼の名前は”れおん”。  
運動神経抜群、成績優秀・・・まさに”完璧高校生”と言つしかないだろう。  
おまけにルックスも良い。

幸せそうな彼だが、嫌だった。  
毎日が、いつもが。  
彼にとつてこれは非日常である。

彼は日常を望んでいた。  
何もない、平和な日常を。

だが . . .

高校の入学式で出会った少女がキッカケで彼の”日常”が”非日常”に。

彼の願いは叶わなかつたのだつた。

その少女は自ら”妖怪”と名乗つた。  
隣の少女は”妖精”と名乗り、  
後ろの少年は”超能力”と名乗つた。

彼は、非日常高校生であつた。

## \登場人物紹介／ ネタばれ注意？（前書き）

初めまして、桜凜です。

小学生ですが何か？（え

主要人物4人を紹介したいと思います。

他の登場人物については最後に紹介します。

今回は美少年・美少女にこだわってみましたよ^\_^p^\_

女の子の方が多いですね、登場w

## ＼登場人物紹介／ ネタばれ注意？

倉崎 れおん（くらさき れおん）

全體科目レベルS 1 - 1

身長 171 . 3 ?

体重 54 . 5 ?

出身中学 桜崎第一<sup>おうざきだいに</sup>学園<sup>がくえん</sup>

本作の主人公で、成績優秀・ルックスよし・運動神経抜群のまさに完璧男子高校生。

だが鈍感で女子には興味なし。

家は諸星学園までバスで25分程のとある東京都内の高級マンションに住んでおり、妹と弟と三人で暮らしている。

母と父は海外で働いていて、母は有名な医者で父は三ツ星レストランのオーナー。

北程馬とは前から知り合いだつたらしい。

古き能力を受け継いだ者？

平日は黒ぶちの眼鏡で休日はカラーコンタクトをつけている。

メイド喫茶Love whiteの執事（従業員）。

諸星学園高等部生徒会生徒会長になる。

木崎 キサキ 悠李 ゆうり

全體科目レベルB 1 - 1

身長 161 . 3 ?

体重 51 . 7 ?

出身中学 諸星学園中等部

超能力者と名乗る可愛い系男子（ショタ系男子）。使える超能力は、念力・テレポート・バイロキネシス・これ等の超能力は完全ではない。

れおんの相棒的存在で同じマンションに住んでいる・

諸星学園高等部生徒会会計係になる・

篠塚  
しのつか  
萌  
もえ

全體科目レベルS 1 - 1

身長 160 . 2 ?

体重 43 . 6 ?

出身中学 第一魔導師学校（札カード科）

もう一人の主人公でもある、巨乳で笑顔が可愛い美少女・

倉崎れおんに一目ぼれ・

魔導師と妖怪が混ざり合つた魔妖怪と名乗り、空狐と名乗る・

魔導師としては、魔法の札と言つ魔法を使える・

入学当時は電車通だつたが、倉崎れおんがバスだと聞いてバス通にした・

妖怪だと言う事もあり、家は妖怪屋敷になつてている・

Love whiteで働いているメイド・

諸星学園高等部生徒会副会長になる・

竹内  
たけうち  
純  
じゅん

全體科目レベルB 1 - 2

身長 156 . 5 ?

体重 43 . 7 ?

出身中学 聖桜女子学園  
せいじょしがくえん

妖精、ウンディーネと名乗る地味で努力家の少女・

3DKのアパートに一人暮らし・

諸星学園高等部生徒会書記になる・

高橋 優子

身長 167・6?

体重 48・2?

出身高校 諸星学園高等部

メイド喫茶、Love whiteの店長・オーナー。  
元ヤンで、喧嘩は得意中の得意。

殻毬茄 凜

全体科目レベルA 1・2

身長 159・3?

体重 45・7?

出身中学 聖桜女子学園

メイド喫茶、Love whiteで働いてる。

倉崎家の父がオーナーのレストランで、シェフとして働いている。  
メイド喫茶では、調理担当。

飯島 愛、舞(いいじま あい、まい)

全体科目レベル (愛・舞) B 3・3

身長 (愛) 161・7? (舞) 164・2?

体重 (愛) 45・2? (舞) 44・9?

出身中学 諸星学園中等部

メイド喫茶、Love whiteで働いている。

萌とは一番仲が良く、二人共顔が広く情報屋である。

悪戯好き。

近藤 秋

身長 164・9?

体重 47.1?

出身高校 諸星学園高等部

メイド喫茶、Love whiteで働く大学生。

高校の時、いじめられていて優子に助けてもらつた。  
それから優子なしでは生きていけなくなつた。

江島 理沙

身長 169.9?

体重 48.9?

出身高校 諸星学園高等部

メイド喫茶、Love whiteで働く大学生。

大学は秋と同じで、秋とは小さい頃からの友達（親友）である。

倉崎 ねおん・りおん（くらさき ねおん・りおん）

全體科目レベル （りおん）B 1 - 2

身長 （ねおん）145.3? （りおん）163.1?

体重 （ねおん）34.6? （りおん）56.8?

出身中学 桜崎第一学園

（ねおん）

れおんの妹。

水泳では数々の優秀な成績を残している。

工口い、変態、れおんLove。

（りおん）

れおんの弟。

チャラい、そして口説きが上手い。

森山 唯斗

もりやま ゆいと

全体科目レベル S 3 - 3

身長 165 . 3 ?

体重 58 . 2 ?

出身中学 隕陽中等学校  
おんみょうちゅうとうがっこう

萌（空狐）を追つている全国トップの陰陽師 .

家は、陰陽師一族で唯斗だけでも1年間で100以上の大妖怪を滅

してきた .

愛、舞とは仲がいい .

## プロローグ（前書き）

1この物語に登場する団体・人物・建物などは実在しません。  
つまりフィクションなのです。

2この物語を書いているのは本Lovingな小学生です。  
難しい言葉は知らないので簡単な言葉で書いています。  
文句があるかたは言って下さい。

## プロローグ

妖怪や妖精、これは非日常アニメに登場するまったくありえない物体である。

だが、その非日常を望んでいる者もいる。

そして望んでいない者も中にはいるだろう。

非日常とは何か。

つまり日常的ではないこと。当たり前ではないことの事を言うのだろう。例えを出すと タネもシカケもないマジック？の事を言つのだ。

この世界にその様なマジックや手品は存在しないはずだ。

存在していたら、それは幻と考えても良い。

他にも、何も使わずに体を浮かせられるとか物を一瞬で移動出来るとか。

それはありえない。

非日常と言えばやはり妖怪や超能力だろう。

妖怪とは日本で伝承される民間信仰において、人間の理解を超える奇怪で異常な現象や、あるいはそれらを起こす、不可思議な力を持つ非日常的な存在のことである。

妖怪と言えばぬらりひょんだ。ぬらりひょんは妖怪の中の総大将とされたいるがその理由はまだ分かつていない。

そして超能力。

通常の人間にはできないことを実現できる特殊な能力の事である。

有名な超能力は、テレポートやテレパシーなど様々な超能力がある。  
超能力＝魔法と勘違いする者も少なくはない。

魔法と超能力はまったく違う。

魔法とは現実には不可能な手法や結果を実現する力のことである。  
魔法を使うと言えば子供の間では魔法使いと言うだろう。残念ながら魔法使いはこの地球には存在しない。

シンデレラや人魚姫など、多くの童話に用いられている魔法だがそれはフィクションであって 魔法？と言つ非日常な言葉は存在しない。

そしてよくあるのが、「成績優秀でモテモテでイケメンな男の子」と言う恋愛小説などの登場人物だ。

こんな素晴らしい男が居ると思つか？

い。

居たのだ。

彼は嫌だった。

非日常が。

彼にとっての非日常は「成績が優秀でモテモテでバレンタインデーにチョコを10個以上貰う」と言う事だ。

彼は鈍感な為に、友人に言われてから初めて自分がモテている事を知つたそうだが・・

彼は平和な日常を望んでいた。  
何もない、平和な日常を。

だが、ある一人の少女の登場により、彼の願いは叶わなかつた。

## プロローグ（後書き）

お借りした資料・ホームページ・Yahoo!辞書 ウィキペディア

## (1) 彼と妹と弟と諸星学園

とある東京都内の高級マンションに彼は住んでいる。

「れおん兄ちやんっ、早く起きてよ~。」

「・・・・・ん・・・・?」

れおん。

彼の名前は倉崎 れおん(くらさき れおん)。生まれた際に、父親が「砺蜿」・・・と漢字で懐けたが、母親が小学生になった時のことを考えて平仮名に直したそうだ。

倉崎れおんは今日、高校に入学する。

田常を望んで。

中学では成績優秀で学年でトップ、スタイル抜群で運動神経も良いと言つ完璧な男子中学生とされていたが、本人はそれが嫌らしいのだ。

よく恋愛小説などにあるアレだ。

『バレンタインデーにチョコを5個以上貰う』

それ位に倉崎れおんはモテているのだ。

倉崎れおんにとって中学校生活は非田常だった。

『バレンタインデーにチョコを5個以上貰う』なんて事はありえないからだ。

だが現実、去年の2月のバレンタインデーには女子からチョコを5個以上貰つてしまい、同じ学年の女子からではなく、1年や2年の女子からも数個貰つたそうだ。

倉崎れおんは女子からのチョココレートを素直に受け取り、ホワイト

「テーにも手作りチョコをお返ししたが、女子には一切興味なし。

『自分がモテいる』と言つのは友人から教えてもらつた事で知つた  
そうだが。

鈍感なのだ、倉崎れおんは。

普通の男なら『モテる』と言つのは嬉しい事だ。  
だが、倉崎れおんにとつては何故か嫌だつた様だ。

そんな倉崎れおんには妹と弟がいる。

「朝・・・か・・・」

「れおん兄ちゃん、おはよううつ？」

妹、倉崎ねおん。

小学6年生ながら倉崎れおんにベタベタ、そして何より変態である。  
こんな倉崎ねおんだが、水泳に関してはバタフライ50mの全国大会にて銀メダルをとつた実力だ。

「りおんはどうした？」

「りおん兄ちゃんだったらリビングに居るよ」

倉崎ねおんはそつ言つと、何かを思い出したよつてリビングへと向  
かつて行つた。

倉崎れおんはその後、制服に着替えリビングへと向かつた。

「れおん、遅いで。」

「寝てた・・・」

りおん。

倉崎れおんの弟、倉崎りおん。

弟と言つても生年月日が2カ月違うだけであり、倉崎りおんも今日、  
れおんと同じ高校に入学する事になつた。

「まさかりおんが高校に行けるとは思つてなかつた。」

「そやな・・・俺が高校行けるなんて夢みたいやわ。」

何故倉崎りおんは関西弁なのか。

理由があり、りおんだけ関西の中学に通っていた為だ。

「りおん、やめる。」

「何がや?」

「その格好だ。」

りおんは外見からしてチャラい男だ。

黒いショートの髪に赤と青のメッシュ、制服を自分風にアレンジしてしまっている。

口説きが上手く、告白〇×待ちの女子が20人いるそうだ。

「それにも、諸星学園の制服つてカツコイイよね。。。」

れおん・りおんが通う事になった高校は、諸星学園高等部もうぼしがくえんと書いた高校だ。

エスカレーター式の私立学校である。

何故彼等がこの学校に入学する事になったのか。

親に強制的に決められ、受験させられたそうなのだ。

れおんは他に行きたい学校があつたのだが強制的に諸星学園の受験を受けさせられてしまった。

りおんは高校は行かず、バイトをするつもりだつたらしい。

二人は受験に受かつてしまつたのだ。

それは凄い。

私立のしかもエスカレーター式の学校に受かつてしまつたのは凄い。諸星学園高等部は小規模の高校であり、毎年の受験生は1000人を超えるが合格するのはその内の20人前後らしくかなりの確率だ。

諸星学園は、制服が可愛い・カッコイイとしても有名であり、細かいチェックのズボンに白いカッターシャツと、ネクタイで冬になるこれにブレザーをはある事になつていて。

女子はリボンに白いカッターシャツ、そしてプリツツスカート。冬服のブレザーは腰丈で可愛らしい。

女子も男子も、リボンやネクタイ、ズボン・プリツツスカートの色は選べる事になつており、女子は赤・ピンク・水色。男子は青・緑・黒。これも人気の一つかも知れない。

「人気なんやてな、諸星学園。」

「日常・・・」

れおんは予想もしていなかつた。  
これから始まる、非日常に。

(1) 彼と妹と弟と諸星学園・(後書き)

倉崎りおん・ねおんについては後で紹介します・

## (2) 登場、母・父・

「あつ？それはいいから早く朝ご飯食べひやつて？入学式始まつちやうから～。」

「あ。母さんと父さんは？」

倉崎家の父と母は海外で働いている為、一年に1、2回程しか帰つて来ない。もしくは、子供に何かあったり。（たとえば不良に絡まれたとか）こんな時にしか帰つてこない。

ちなみに母は有名な医者、父は三ツ星レストランのオーナーである。

「帰つて来るよ？」

だが今日、日本へ帰つて来る事になつている。

「子供の入学式と卒業式だけは見たい？」との事で、れおんやりおん、ねおんにとつては10カ月の再会となる。

「早くれおんの顔見たいわつて電話で言つてたよ？」

母、由美はれおん」〇〇、つまり自分の産んだ子供の事が好きと言つ事だ。

普通の好きではなく、恋愛感情が芽生えても可笑しくない好きだ。マザコンの反対である。

由美はれおんの為なら何でもやる。たとえエベレストを登る事でも。地球を一周する事でも。例えばれおんが「これ、欲しい。」と言つたのならば由美は「分かったわ。」と言つて、買つてしまつのだ。

一方、りおん・ねおんに対しては「駄目。」と言つ。

「めんどいわあ・・・。れおん、どうするん？」「どうもしない。」

ダッダッダッ

足音。

「れ・お・ん～？？」

足音の正体、それは倉崎家の母、由美のものだったのである。由美はれおんに抱き付き、これでもか……と言ひ程に頬にキス、そして頭を何度も撫でた。

その光景を見たりおん・ねおんは畠然とし、りおんはベランダへ行き「あああああああああ」、と大きな声で叫んだ、ねおんはその場に倒れ込んだ。

「れおん、怪我してない？何か困つてない？欲しい物ない？」

「ない。父さんは？」

「・・・仕事ですって・・・。子供の入学式位日本に帰つてきてくれば良いに・・・。まあ良いわ。れおんに会えただけでも嬉しいですもの！」

そつ言つた途端、またりおんはベランダで「せやああああああああああああああああ」と叫び、ねおんは復活したかと思えたがそのままアフター。

それ程れおんへの愛が深いと言ひ事である。

「りおん、ねおん、落ちつけ。」

「落ちつけねーよ？」

「まあまあまあ、三人共やめなさいよ。」

「お前のせいだらうが！」「

\* \* \* \*

別の場所では、計画が進み出していた。

「倉崎れおん・・・・・面白そうな子・・・・・

彼女はそつ言い、不気味に笑つた。

### (3) 入学式と由会い

あれから制服を身につけ、車に乗った四人は入学する事になつた諸星学園へと向かつた。ねおんはルンルンと鼻歌を刻み、れおんはメンズ雑誌をパラパラと読み、れおんは携帯をいじつていた。

「着いたわよ。」

そこはどこかの国の城かと思う程に高い校舎、そして綺麗な校庭に門。これはどこから見てもどう見ても学校ではないだらう。そんな学校にれおん・りおんは入学するのだから凄い。

最初に説明したとおり、諸星学園の試験は超難関で合格した者は天才と言つしかないだらう。そんあ者達が来る高等学校、諸星学園である。

ねおんは「～」と鼻歌を刻んだまま、熊の人形を抱いて車のドアを開け、りおんは「着いたんやな

」と呟きドアを開け、れおんは母、由美にドアを開けられて車を出た。

すると、ねおんがある事に気付いた。

「お母さん、なんか視線が凄くない？」

「もうかしら？」

それもそうだ。

美少年とされているれおんに外見はチャーリーが顔はまあまあイケてると言つりおん、そして口リ系小学生ねおん、スカウトは当たり前の母、由美・・・この四人が歩いているのだから。

そんな事なんぞ、れおんは無視。真っ直ぐ、体育館に向かつて歩き出した。

そして受付をし、れおん・りおん・ねおん・由美はそれぞれの席についた。どうやら席はクラス順で出席番号順になつてゐるらしい。れおんがぱっと見たところ、席の数で判断すると

今年の新入生は60人と平均より大幅に多い数だ。三クラスあり、一クラス20人程度だろうか。

開始30分前とだけあって、来ていらない者も沢山いる様だ。

「ヤベ。携帯忘れた・・・」

と、思いだした様に言つたれおんは由美に車の鍵を借りて体育館を出た。

駐車場に着いたれおんはさっそく携帯を取り、車の鍵を閉めた。 . . . . .

「何震えてんだよ、姉ちゃん。」

「なあ良いだろ？遊ぶ位よお・・・」

「や、やめて！」

ナンパだ。

「こんな時代にナンパする馬鹿なんて居るのか」、そう思つたれおんだったが性格が性格の為に見ぬ振りは出来なかつた。そしてれおんは

「何やつてんだ。」

「あ、? うるせーよ。」

ドフッ

一瞬の出来事であつた。れおんは得意な合氣道を使って相手を四方投げ。れおんは「ふう・・・弱い。ナンパするならもつと強くなつてからにしろ。」と言い捨てて去つとしていた。

すると、ナンパされていた女子生徒が「良ければ一緒に行きませんか？」と言つて来た。もちろん、れおんが断れる訳がないだろう。れおんの性格であるからだ。

その女子生徒はトップで入学してきたりしく、新入生代表らしく凄い頭の持ち主であった。

「あ、私は篠塚萌です。貴方は？」

「倉崎れおん。あー、敬語とかめんどいからタメで良いよ。」

「ありがとう。」

そつこつと笑った萌は「や、行くー。」と言ご走って体育館へと向かった。

## (4) クラスマイトヒル対面・

篠塚萌と吉田乳美少女との出会いがあり、その後体育館に。入学式始まりまで5分だった為か体育館内は緊張感がはしつていた。

入学式終了後、クラス発表があり倉崎れおんは1-1、りおんは隣の1-2となつた。今日は単なる顔合せの様なものだけでお決まりの自己紹介をし、下校となつている。

明日には「新入生歓迎会」をやる予定になつてているが、その歓迎会の賞品があまりにも凄い事に毎年の新入生は驚いていた。

「自己紹介は名前、出身中学と得意な科目。」こんな感じで出席番号準からー。」

1-1組担任の30代後半男性教師が言つと、1番の新井と言つ者が自己紹介を始めた。れおんがクラス中を見回したところ、人数は20人程度。「あ」の次は「か」位か・・・とかなんとか考えている内に一番の自己紹介は終わつた。

「出席番号一番、木崎悠季です!...僕の得意な教科は...な  
いかなつ?あ、出身中学は諸星学園中等部だよ!皆、宜しくねつ」

この元気が良すぎる自己紹介に皆は拍手をするしかなかつた。「こいつ、なんだ・・・」と思つている内に倉崎れおんの番がやつてきた。どうやら、1Jの席準は出席番号順であるらしい。

ガタツと倉嶺れおんが椅子を立つと女子の視線がれおんへ向いた。それもそのはずだ。恋愛小説などの登場人物にたとえて言うと、『成績優秀でモテモテな男の子』なのだから。

「倉嶺れおん。出身中学は . . . 桜崎第一学園<sup>おうざきだいじゅくがくえん</sup>。得意な教科 . . . 保体。. . . 宜しく。」

倉嶺れおんの拍手は前の木崎悠季の拍手よりも無駄に大きな拍手だった。その事に気づいたれおんは頭にハテナマークを浮かべたまま椅子に座った。やはり鈍感だ、倉嶺れおん。

すると倉嶺れおんの机をコンコンッと前の席の木崎悠季が叩いてきた。

「れおん君だつけ？ 君、鈍感すぎるよ。」

「ん？」

「まあいいや。 . . . おつと、今年のトップ様の田口紹介だッ。」

木崎悠季はそつまつと倉嶺りおんの耳元で「あそこ」と小さく囁いて一番前の席を指さした。

「出席番号5番、篠塚萌です。出身中学はだ・・・じゃなくて、諸星学園中等部です。得意な教科は古典。宜しくね。」

そして、篠塚萌の自己紹介後も無駄に拍手が大きかった。それはそうだ。

篠塚萌は巨乳で美少女、また「萌笑顔」と言つ笑顔があり、その笑顔をつけた者は一発KO、女子の場合はその場に倒れ男子の場合は鼻血を出す程。また、メイド喫茶で働いていると言つ噂もある。

そして自己紹介が終わり、今日は下校となつた。倉崎れおんと木崎遊季が教室を出る途中、あの巨乳美少女がやつて來た。すると周りに居た女子は篠塚萌に、男子は倉崎れおんに目を向けた。

「れあん……君だつたよね？入学式の時はありがとわ。」

「れあんでいい。」

「あっ、うん。あの、家つて何処にある？私、電車通学なんだけど……」

「俺、バス通だから。」

「……そ、そつか……うん、分かつた？バイバイ？」

篠塚萌は顔を真っ赤にして教室を出て行つた。すると女子と男子の視線は消え、木崎遊季が「鈍感すぎるな……」とれおんに聞こえない程の声でボソッと呟いた。  
そう、倉崎れおんは鈍感すぎるのだ。

(5) いじめ

倉崎れおんが教室をでると、篠塚萌が隣のクラスのドアに寄りかかっていた。「一緒に帰ろう? //」

別は良いけど、赤い色はしなから言へと愈嶮れおんは  
と彦を真に赤はしなから言へと適当な答えを言つた。

突然だが、貴方は「いじめ」を知っているだろうか？ そう、よくドラマやアニメなどである上履きをトイレの中に入れたり体操着をベルンダから落としたり・・・というものである。もつと酷いものは顔面に雑巾をおとす・・・などと言ったものだろうか。今の時代にも「いじめ」は存在する。

セウ、ラーラ、諸曜学園體第部にも。

れおん 遊玄 茄は華経へ手が そこで目撃したのは

「 ぶははははは？」

「いじめ」であつた。数人の生徒が少女にバケツに入つていた水をかけたのだ。周りにはその生徒、少女とれおん、遊季、萌の数人しかいなかつた。それを見た萌は「・・・自業自得よ・・・」と誰にも聞こえない程の声で呟いた。

さて、倉嶋れおんはどうしたか。・・・性格は性格の為、見ている事は出来なかつた。そう、助けに行つたのだ。

「おい、何やつてんだ。」

「あ、えっとお、間違って水を撒いてえ……」

(うわツ、めつぢやカツコイイ・・・)

「そ、それで今、タオルを貸してあげようと思つてたんです。・・・

「めんねえ……（あ、謝った方が良いのかな？）」

「嘘つきめ。馬鹿、アホ。俺は嫌いだ、嘘つく奴。もちろん、お前達も。」

すると数人の女子生徒は「え、最悪つづりひひひひひひひひ？」と叫びながら外へ出て行った。するとこじめられていた少女は倉崎れおんに「ありがとうございます・・・」とお礼を言い、靴箱を後にしようとした。

が。

少女はつまずいた。

「危ねつ？」

「え？」

「…………つと。」

現在、抱き合つてゐる状態。もちろん、顔と顔の間は2?弱、田と田は合つてゐる。こらが抱き合つ時の正しい姿勢だ。少女の腕は倉崎れおんが強く掴んだままだつた。

この状態に周りの数人の生徒は見て見ぬふり。木崎遊季は「あらう・・・・」と呆れたように。篠塚萌は「！」と驚いた顔をした。「お前、危なつかしい。つか、何もねエージヤン・・・下。」「よくある事です・・・・スミマセン、ドジなんです、私。」「俺は好きだけど、ドジ娘。あ、俺は倉崎れおん。1 - 1。お前は？」

「竹内純たけうちじゅんです。1 - 2。それ、告白ですか？」

「俺のタイプ。あ、クラス隣だな・・・何かあつたら来い、絶対。」

「はい。それ…………れ、れおん？か、帰ろう？」

いいムードだつたところに篠塚萌が倉崎れおんの腕を強く引っ張つた。その為、抱き合つ姿勢は壊れてしまつた。自分的にはそのままあれしてあれして一つて感じが良かつたのだが。まあいい。篠塚萌は倉崎れおんの腕を引っ張り「木崎君！」と呼び靴箱を後ろにした。

「まさか君がドジ娘ちゃんが好きなんて思つてなかつたなあ？」

「え？あれ、本氣の告白だつたの？」

「…………タイプはドジ娘。」

「本氣の告白だつたら面白くなりそつだつたのに。それでー、見事両想いになりましたーつになつたら僕も応援してあげてたのになあ・・・。あ、もしかして本氣での子の事好きだつたりするのー？」

「あははは。そ、それはないよ木崎君……」

恋愛話（恋話）をしている内に篠塚萌が「駄、こじだから」と言つて篠塚萌とは別れた。…………何秒間か沈黙が流れた。

「あの」

同時。

「君からりで良じよ。」

「…………お前、何者だ？」

「僕は弟キャラという可愛い系キャラだよ？」

「…………まあいい。んでお前は。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5954x/>

---

非日常はお嫌いですか？

2011年12月1日19時52分発行